

設問番号	I. (1)
解答例	ELM は説得理論の中でどの程度オーディエンス（読者・聴者）がメッセージに対して関心を持つかによって、その内容を各自の頭の中で拡大・発展させていくことを説明する。この過程には大きく分けて二つの道がある。中心ルートと遠回りルートである。関心が高い内容であれば中心ルートを利用する。中心ルートでオーディエンスはよく聴いて（読んで）中の議論・出てくる証拠等に説得力があるかどうかを判断して、またその議論を自分で発展させていく。このルートはオーディエンスに思考の労力を求める必要があるが、それにより説得効果も上がる。例えば大学三年生に対しての就活についてのメッセージなら中心ルートで解釈することを期待できるだろう。遠回りルートは読者・聴者がそれほど重要でない内容に対して機能する傾向がある。それほどメッセージにそこまで注目せず、簡単な気づきで判断する。（場合によって無視するか簡単に受け入れる。）例えばスーパーで食器用洗剤を買う時、多くの人はあまり考えず、色・香り等で簡単に決めることが多いだろう。
出題の意図	この質問は近代の説得理論の中の重要な一つ概念をとりあげ、それについてを説明することを通して説得理論の基礎的なレトリック理論を理解しているかどうかを試す。

設問番号	I. (2)
解答例	Ethos（信憑性）Pathos（感情アピール）Logos（論理性）はすべて重要であるが、状況と内容によって機能が多少変わる。信憑性が何よりも説得力があると言われるのは、信憑性が強い時、その人が言うだけで済むからだ（例えば親と小さい子供の関係や、医者と患者の関係）。テレビ宣伝でもこのアピールがよく使われる。テレビタレント・スポーツ選手等を使って物を宣伝する（この場合、信用性がそれほどないケースがかなりあるが、この場合も感情アピールになる——人気者だからだ）。重要な内容のメッセージなら（大きな判断——車を買う等）、論理性は大事な働きをするケースが多い。論理性の強いメッセージは説得力が増すと効果が長引くこともある。感情アピールは日常的なテレビ・インターネット宣伝でよくみられる。効果はあまり長引かないが、重要なことでなければ（例えばお茶のブランド・その他の飲み物）、効果がある。以上の説得方法はすべて重要であるが状況によって、文化・オーディエンス・時代も含めて、利用方法・働きと効果が変わる。
出題の意図	この質問は西洋の古代のレトリック理論の基礎的理解を試し、また、国際社会の中の事情（また文化・歴史等）の違いを考慮しながらレトリック理論を応用的に当てはめていけるかどうかを試す。

設問番号	II. (1)
解答又は解答例	人間が子供時代から大人になるにつれて、世界観と世の中の理解に対するメディアからの影響がだんだん大きくなっていく。小さな子供でも、家の中のテレビ・インター

	ネットに接することで非常に限られている世界を見て吸収している。教育現場では、これは放送メディアの普及時代からかなり重要な課題になっている。その理由は主に二つある。一つは放送メディアが提供できる情報が非常に限られている。例えば活字メディア（新聞等）を読む人とテレビからニュースを吸収する人の接している内容がかなり違う。テレビの技術・放送の在り方などでそのようになっている。もう一つの理由は特に 20 世紀後半のメディアの普及と発展によって情報源が非常に増え、情報源によってかなり違う世界を見て吸収することになった点だ。（勿論これは国によってかなり差がある。）以上の理由から若い時からメディアの使い方・情報処理の仕方の教育が重要になっている。
出題の意図	この質問はコミュニケーション学（メディアコミュニケーション）の理解を問うための問題で、メディアが社会の中（歴史の中）の役割、影響をメディアコミュニケーションの理論・概念を理解し、説明できるかどうかを試す。

設問番号	II. (2)
解答又は解答例	Google や SNS 等のサイトの多くがアルゴリズムを使って、利用者が使っているサイト・ニュース等を記録して、それを使って同じような内容か、関連のある、関心を持つと思われる宣伝等をその利用者に提供する。また今の若い人はかなり多くがニュースをオンラインで見ている。それも同じく、見ているものが記録されて、同じような物が似ているようなものが提供される。その上、インターネット上では誰でも簡単に内容が載せられる。だからたくさん間違っている内容も載せられている。研究によるとこの間違っている内容は（特に酷い・極端な内容）、正しい内容より早く拡散される。見ている人が（間違っていることを知らずに）友達にリンクを共有するからだ。だから上記の II-(1)よりメディアの接し方、選び方、情報処理の能力が重要になっている。今の時代は情報が非常に見つけやすくなったが、その情報に対して批判する能力（思考能力）の教育が重要である。
出題の意図	この質問は現代のメディア技術の発展に伴っている変化とその影響についての理解、現代社会の中のメディアの役割・影響を理解し、コミュニケーション学者・教育者の役割を説明し、メディアコミュニケーション学問が直面している課題についての理解を試す。

設問番号	III. (1)
解答又は解答例	「universalist approach」とは、文化が異なっても、人間には共通して当てはまる合理性、価値観、道徳原則が存在し、それらはすべての文化に普遍的に適用されるべきだと考える立場である。つまり、文化の違いがあっても、何が正しいかを判断するための共通の基準を持つことができると考える。
出題の意図	英文の内容を正確に理解し、主要な概念を説明する力を確認する。

設問番号	Ⅲ. (2)
解答又は 解答例	「relativist approach」とは、合理性や価値観、道徳はそれぞれの文化によって異なるため、すべての文化に共通する倫理基準は存在しないと考える立場である。そのため、自分の文化の基準だけで他文化の行動を一方向的に判断するのではなく、その文化の価値観や背景を踏まえて理解しようとする。
出題の意図	英文の内容を正確に理解し、主要な概念を説明する力を確認する。

設問番号	Ⅲ. (3)
解答又は 解答例	例えば、日本の捕鯨をめぐる国際的な対立が挙げられる。捕鯨に反対する国や団体の中には、クジラの保護や動物福祉は文化の違いを超えて重視されるべきであり、日本もそのような共通の倫理基準に従って捕鯨をやめるべきだと考える立場がある。これは、特定の文化の慣習よりも、すべての社会に当てはまる普遍的な価値を優先する universalist approach と考えることができる。 一方、日本の捕鯨地域の人々の中には、捕鯨を単なる動物利用ではなく、地域の歴史、食文化、生活、伝統と深く結びついたものとして捉える人もいる。この立場からすれば、捕鯨を評価する際には、外国の価値観をそのまま当てはめるのではなく、日本や地域社会の文化的価値や歴史的背景を基準として考える必要がある。そのため、こうした文化的背景を尊重し、捕鯨を認めたり、その価値を積極的に評価したりする考え方は relativist approach の例として捉えることができる。
出題の意図	本文で示された抽象的な概念を具体的な国際的・文化的事例に応用し、一つの事例を異なる倫理的立場から多面的に分析する力を測る。

設問番号	Ⅳ. (1)
解答又は 解答例	グローバル化を、人・モノ・資本・情報・文化などが国境を越えて移動し、社会間の相互依存が拡大・深化する現象として理解していることが求められる。 肯定的側面としては、例えば、国際的な経済活動の拡大、技術・知識・情報の共有、人や文化の交流の促進、国境を越えた社会的課題への協力などが考えられる。一方、否定的側面としては、経済格差や地域間格差、グローバルな競争に伴う労働問題、文化的画一化、環境問題、グローバル化の利益や負担の不均衡などが考えられる。西欧文化中心主義やオリエンタリズムなどの概念を使って、経済、政治、教育、文化の側面に潜む弊害についても議論してもらいたい。 特定の事例や立場を唯一の正解とはせず、グローバル化の肯定的側面と否定的側面の双方を理解し、適切な具体例と関連づけながら論理的に論じていることを評価する。
出題の意図	グローバルコミュニケーション研究の領域にとって基本となる「グローバル化」という現代社会の基本的現象を多面的に理解し、その肯定的・否定的影響を具体的事例と関連づけて考察する能力を評価する。一般論に流されることなく、反省的・批判的な

	思考を求める。
--	---------

設問番号	IV. (2)
解答又は解答例	文化のグローバル化について、文化的な価値、意味、表象、生活様式、商品などが国境を越えて流通し、異なる社会や文化の間で共有・受容・変容されていく現象として説明できることが求められる。また、マスメディア、インターネット、SNS、対人的・異文化間の交流などのコミュニケーションが、文化的な意味や実践を国境を越えて伝達・共有する重要な役割を果たしていることを理解している必要がある。その一方で、文化は一方的に伝達されるだけではなく、受け手によって解釈され、既存の文化と組み合わせられ、変容する場合があることなどを論じることにも評価する。
出題の意図	文化のグローバル化について、単なる文化の国際的拡散としてではなく、コミュニケーションを通じた文化的意味の伝達・共有・解釈・変容の過程として理解しているかを確認することを目的とする。異文化コミュニケーション論の基本として、グローバル化の理解を求める

設問番号	V. (1)
解答又は解答例	一般的な区別として、Sex は主として身体的・生物学的な性に関連する概念として、Gender は社会的・文化的に形成される性別に関する役割、規範、期待、アイデンティティなどに関連する概念として説明される。ただし、両者を完全に独立した固定的なカテゴリーとして扱うのではなく、ジェンダーに関する意味や規範が社会的・文化的な実践やコミュニケーションを通じて形成・維持・変化することへの理解、またその権力作用についても示されていることも評価する。
出題の意図	ジェンダー研究の基本概念である Sex と Gender の区別を理解しているかを確認するとともに、ジェンダーが社会的・文化的な意味形成と関係していることを理解しているかを評価する。とくにジェンダーがコミュニケーション過程を通じて形成される点、またパワーの問題に関して議論できることを求める。

設問番号	V. (2)
解答又は解答例	Unconscious bias（無意識の偏見）とは、人が必ずしも意識することなく形成・保持している特定の集団や属性に対する先入観、固定観念、判断の傾向などを指す。ジェンダーとの関連では、例えば、性別に基づく役割期待、能力についての固定観念、職業やリーダーシップに関するイメージなどが、本人が意図しないまま判断や行動に影響する可能性がある。さらに、こうしたバイアスは個人の内面的な認知だけでなく、日常的な言葉遣い、会話、評価、メディア表象、組織内コミュニケーションなどを通して表出・再生産される可能性がある。他方、既存のステレオタイプを問い直すコミュニケーションによって、バイアスを認識し、変化させる可能性について論じることにも評価する。

出題の意図	unconscious bias を単なる個人的な「偏見」として捉えるのではなく、社会的なステレオタイプや規範と関連づけ、それらがコミュニケーションを通じて表出・維持・再生産されうること理解し、具体的な社会現象と関連づけて考察する能力を評価することを目的とする。さらにジェンダー化の社会構造の問題が、個人の認知の問題に還元することができない点を議論してもらいたい。
-------	--

設問番号	VI. (1)
解答又は解答例	定量的アプローチは、現象を測定可能な変数として捉え、数値データと統計的方法などを用いて、変数間の因果関係や傾向、仮説などを検討する研究方法である。サンプル数の大きなデータを扱い、一定の条件のもとで一般化可能性を検討できることなどが強みである一方、個々の経験や社会的文脈、意味形成の詳細を十分に捉えにくい場合がある。 定性的アプローチは、インタビュー、観察、文書・言説などを通じて、複雑な社会現象や人々の経験、意味、社会的過程や文脈を詳細に理解することを重視する。現象を文脈の中で深く理解できることなどが強みである一方、研究対象や事例が限定される場合が多く、統計的な意味での一般化には限界がある。 両者を単純な優劣関係として捉えるのではなく、研究目的や研究質問に応じて適切な方法を選択する必要があることへの理解を評価する。
出題の意図	社会科学における定量的研究と定性的研究の基本的な考え方と特徴を理解し、それぞれの長所・短所を研究目的との関係から説明できるかを評価する。

設問番号	VI. (2)
解答又は解答例	インタビュー調査では、質問の仕方、研究者と調査協力者との関係、研究者の社会的立場、関心、価値観などが、語られる内容やその解釈に影響する可能性がある。そのため、インタビューデータを研究者から完全に独立して存在する「客観的事実」として捉えることには限界があり、データの客観性を目的としない。このことは定性的研究が恣意的であってよいことを意味しない。研究者自身の立場や調査過程への影響を自覚し、それを明示的・批判的に検討する reflexivity（再帰性）、研究手続きの透明性、データに基づいた解釈などによって、研究の妥当性や信頼性を確保することが重要となる。 定量分析が依拠する客観性も無理が多く、研究者が無自覚に価値中立を前提とする点も大きな問題である。「客観性」を研究者の影響を完全に排除することとしてのみ理解するのではなく、研究者と研究対象との関係を自覚し、それを検討可能な形で示すという観点から再考できていることを評価する。
出題の意図	インタビュー調査を単なる「情報収集」の技法としてではなく、研究者と調査参加者との相互作用を通じてデータが生成される研究過程として理解しているかを確認する。「客観性」についても、研究者の主観を単純に排除するという理解にとどまらず、

2026 年度（春期）大学院 外国語学研究科 外国語学専攻 博士前期課程 入学試験【コミュニケーション学】

	reflexivity や研究過程の透明性など、定性的研究における研究者の立場を踏まえて批判的に考察する能力を評価することを目的とする。
--	--